遊戯

たまさ。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
遊戯

【Ｎコード】
Ｎ７３３２Ｚ

【作者名】
たまさ。

【あらすじ】
商家の娘であるコリン・クローバイエに持ち上がった婚約話。突然持ち上がった男爵家次男との婚約に父親の思惑を疑問視するコリン。そしてその婚約を叩き潰そうとする侯爵家嫡男アルファレスとの――これは決して甘くない遊戯。

プロローグ

中央から西よりにある労働階級向けに作られた教会は、それでも王都カジェスタに造られているだけあってその存在を強固に示す立派な佇まいを見せていた。

はめられたステンドグラスは外からの光に数多の色を添えて静謐（せいひつ）な館内を満たし、反響する司祭の言葉は静かに頭を垂れる信徒達の上を流れる。

幾つも並んだ長椅子に、そこだけはっきりと浮き立つように目立つのは一人の青年だった。

淡い金髪は猫毛なのか多少の癖を持ち、座っていてもその姿勢のよさと育ちの良さがにじみ出る。

今背を向けていてその顔を見ることは適わないが、その面立ちについては良く知っていた。

切れ長の瞳に、長くけぶる睫毛。薄い唇はいつなんどきでも笑みを称え、その淡い翠の瞳は柔らかく女性を見つめる。自分の容貌がどれほど女性の注目を集めるのか全て承知し、立ち居振舞うことのできる男。

近くに座っている若い娘達が、ちらちらと気にしてはその青年へと視線を送っていたが、人々の関心を集める当の本人はといえばただ静かに視線を伏せて厳粛に司祭の言葉受け入れている。

まるで一葉の絵のようだといえば大げさだろうが、娘達にはそのように見えていたことだろう。

そして、アリーナ・フェイバルもまた、その一人だった。

ただしアリーナの視線は彼女達の純朴そうな照れを含むものでは無い。

ただ静かに、自らの席の幾つか前にいる青年の頭を見つめる。

――アルファレス。

何故、今、このときに彼を見つけたのだろう。
アリーナは神様を信じてなどいない。
今日、こうして教会を訪れたのはむしろ恨み言をぶつける為だ。
誰かに聴いてもらいたく、ただ腹のうちにある悲しい憤りをぶつける為だけに、訪れた。
貴族達が好んで訪れる中央の教会を外したのも、むしろ誰一人として知り合いになど会いたくないという気持ちだった。
懺悔室で粛々と、言葉を吐露してそうして全てを清算してしまうつもりであったのだから。
けれど、神はいたのだろうか？
アリーナはただじっとアルファレスを見つめた。
自分の腹部に置かれたレースの手袋に包まれた手をすっと見つめ、腹のうちにどす黒いものを吐くようにゆっくりと呼気を落とす。

司祭が最後の祈りを口にし――その場の緊張の糸のようなものが途切れた。
アルファレスは席を立ち、自分の周りにいた女性に柔らかな微笑みと共に声をかけて席を離れる。
そして、まるで冗談のようにくるりと振り返った。
ぴたりとアリーナと視線が合う。
まるきり予想していたかのように、身じろぎもせずに優雅にアルファレスは微笑んで見せた。
「やぁ、レディ・フェイバル」
「……ごきげんよう、アルファレス」
アルファレスは作り物めいた微笑を湛え、手の中の帽子をくるりと回した。
とんっと胸に帽子を当てて、小首をかしげる。
じっとその翠の眼差しがアリーナを見つめる様は、物慣れぬ女性

ならばうっとりと見ほれてしまうだろう。
　まるでアリーナの全てを覗き見るように。澄み渡った湖畔の色彩がアリーナの瞳を見つめる。真実恋焦がれる相手を見つめるかのように。
「外に出ようか？」
「アル……」
「ぼくに話しがあるんだろう？」

　それはただの偶然でしかない。
アリーナはそこにアルファレスがいるなどと考えもしなかった。けれど、アルファレスがそう告げれば、唇はすぐに応えをのせていた。
「ええ」
　自分はきっと彼に会いにきたのだ。
もとより神など必要がなかった。
言葉にしながら胸の奥深い場所、もう忘れてしまいそうな過去にあった何かが、つきりと傷んだ。
「なら、外に出ないと」
なにせ、
「神様が憤慨するような話し、こんなところでするものじゃないよ」
　まるでアリーナの心を全て見透かすように、アルファレスは肩をすくめた。
それを受けてアリーナは一瞬だけ、昔――アルファレスと子犬のようにじゃれていた無邪気であった子供の頃のように瞳を瞬いた。
　それはほんの一瞬。
大気に溶けるようにして消え去り、そしてアリーナはまったく違う微笑を落とした。

過去と、そして何か別のものとの決別を示すような――それは儚い微笑みを。

その1

ウイセラが帰還したのは砂漠のサディラ国を巡り、二度の満月を体験したあとのこと。

決して豪華とは言えない貿易船と、それを守る為の護衛船二隻という小船団を従えてのことだ。

巨大な錨を一息に海底に沈め、船の甲板から幾つものロープがおろされる。それを水夫があわただしくあやつり、主船は緩い振動と共に接岸した。

それと同時に俄かに港は活気付く。船の積荷を一息におろしていく。

本来であればそれと同時に積荷を載せる作業があるのだが、船の主はここで休暇を楽しむ予定を組んでいた為、積荷の代わりに船に乗り込んだのは船の点検の為の船大工達だった。

「お帰りなさいませ」

港に停泊した船を出迎えたのは、ヴィスバイヤ貿易の顔役であるドゥマーニだった。

ドゥマーニは桟橋を歩いてくるウイセラの姿に一瞬微妙な顔をしたが、さすがに一瞬だけのこと、すぐに丁寧に頭を垂れて上役でありヴィスバイヤの副長を迎え入れた。

半年の間この地を離れていた男との対面だが、相手は少しも変わっていないことにドゥマーニは瞬時に気付いていた。

いや、おそらくドゥマーニ以外の全てのものが否が応にも。

ウイセラはやけににこやかな笑みを浮かべ、ドゥマーニから差し出された手をがしりと掴んで引き寄せ、その肩を陽気に二回叩いて友好を示す。

相手にとって随分とはた迷惑な程の友好だが。

「やぁ、ドゥマーニ！
相変わらずてかてかと健康そうで美味しそうだね！　君を見るとスパイスの利かせた鳥の丸焼きにかぶりつきたくなるよ！」
――それは褒め言葉だろうか？
ドゥマーニの背後で控えていた部下達が引きつるが、ウイセラは少しも頓着する様子はない。
「絞めたての鳥をあとで館にお届けいたしましょう」
ドゥマーニが口元を引きつらせて声を絞り出せば、相手は実に嬉しそうにうなずいてみせる。
「うんうん。どうせ我が奥方殿は自宅にいないだろう？　是非とも鳥はクローバイエの屋敷に届けてくれたまえ。あ、でも絞めたてよりはきっちり血抜きの済んだものにしてくれたまえよ。羽根もむしってあるなら腕によりを掛けてぼくがクリスコをたっぷりと塗りたくってあげよう」
「……」
「ふふふ、ふにふにのあの鳥皮にクリスコを塗りたくるあの微妙な感触はなんともいえないエロスを感じるね。そう思わないかい？　愛だよ、愛。
なんといっても今日はぼくの愛しい女王様と一緒に夕食をとるつもりだからね！　愛情たっぷりのぼくの手料理に、女王様もきっと極上の笑みを浮かべてくれるだろう」
ウイセラはやけに陽気に言う。
この男がその陽気さをかなぐり捨てるのは親族の前だけと決まっていた。
たとえ自らに敵意を向けるものがいたとしても、その口元に張り付いた微笑をとることはないだろう。
ウイセラの一種独特のユーモアを無視し、ドゥマーニは必要な報告を口にした。

「奥方様は一月程前に一度おもどりになられましたが、その後は」
「ああ、いいよ。ハニーのすることに口出しはしないことにしているんだ」
――貿易商人であるウイセラは三ヶ月以上本土を離れていたし、また彼の妻であるアイリッサも仕事の為に自らの邸宅を離れているのは常だった。
ウイセラが最後にアイリッサを見たのは、西南にあるクロイセムという島で必然の再会を果たした頃のことだから、もう四ヶ月以上もその姿を見ていないことになるだろう。
ウイセラは簡単に挨拶を済ませると、自らの部下にあとの仕事を言いつけ、幾つかの荷物を馬車に詰め込み、ドゥマーニへと告げたクローバイエ邸へと急がせた。
それを見送ったドゥマーニが、やがてゆっくりと嘆息する。

「まったく、なんだアレは？」
ぼやいた言葉に、仕事の内容の確認の為にいたウイセラの部下であるニッケルは苦笑で応えた。
アレ、というのが何を示しているのか、ニッケルは良く判っていた。

「砂漠の盗賊が着ていた衣装です」
「盗賊！」
「砂漠の民は体にぴったりとした衣装よりもゆったりとした衣装を好みます。太陽や照り返しの大地が暑いので体と衣服との間に空気を孕む自然とああいった形のものになるようです。頭には一枚布で作られた帽子（ターバン）。あれは巻いてあるだけなんですよ。面白いでしょ？」
説明しながら、ニッケルはくつくつと喉の奥を鳴らした。
まるきり自分の主がさも面白いとでも言うように。
しかしドゥマーニはぶるりと身震いした。

「そんなものを仕入れてきたわけじゃないだろうね？」
砂漠ではともかく、この地では到底売れるとは思えない。
確かに金のバイピングに細かい縁取りがあったり、鮮やかな蒼の染めであったりと目新しくて人の気は引くだろうが、大衆受けはしないだろうし、矜持の高い貴族だって――
しかし、とドゥマーニが眉を潜めたところで、ニッケルは軽快に笑った。

「いやだな、あれは買ったんじゃありませんよ」
「作ったとかいうオチかね」
ふんと鼻を鳴らしてドゥマーニが呆れ果てて眉をひそめると、ニッケルは意味ありげに殊更ゆっくりとした口調で応えた。
「いえいえ、はいだんですよ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7332z/

遊戯

2011年12月24日11時49分発行